

ホワイトマンの文化は、本質的には物質的である。成功の尺度は「どれだけ財産を手にしたか」である。

レッドマンの文化は、基本的には靈的であり、成功の尺度は「どれだけ仲間に対して役立つことをしてあげたか」である。生活の様式、考え方、行為の一つ一つに靈的な意味があり、その背景には、靈的世界の存在についての、ただの信仰とは違う本格的な理解がある。

司祭もいなければ偶像もなく、犠牲いけにえの儀式もなく、「大靈」Great Spiritという目に見えざる大自然の支配力を崇拜し、信仰の中にそれを拝する。大靈はその名の通り大いなる靈であり、小さな靈であるわれわれ創造物にも同質の靈性を賦与してくれている。したがって、両者の間に交霊が可能であるという。

四つの教訓

- (1) 唯一絶対の大靈が存在する。万物の創造者であり支配者である。われわれはその分靈としての存在を有する。

永遠の存在であり、形体を持たず、全知にして全能

であり、言語で描写することのできない存在である。あらゆるものが大靈の中に存在し、大靈を通して活動する。われわれの崇拜心と忠誠心は、その大靈に向けなければならない。

恵みはすべて大靈より下される。ゆえに、敬虔なる気持で大靈を志向しなければならぬ。大靈の恩恵に浴するためには、祈りと犠牲と思いやりのある生活を重ねることが必要である。大靈についての知識を得るためには、鍛錬と断食と寝ずの行を重ねることが必要である。その知識さとしりとともに導きを得られる。

大靈は本質的には非人格的存在である。それが動物や小鳥・雲・雨・山河・人間あるいは動物に宿り、個性をもって顕現しているのが現実である。大靈のもとに無数の個靈が控えている。(エンゼル、フェアリー、ゴブリン、デーモンなどの存在を認めているが、三位一体とか原罪といった教義は見られない)

- (2) 地上に誕生した人間が第一に心がけねばならないことは、人間として円満な資質を身につけることである。

それは、人間を構成する器官とエネルギーを正常に発達させ、それを正しい手段で満足させることによって達せられる。すなわち、肉体的に、靈的に、そして入のために役立つ資質において、成人となることであ

る。

(3) 成人としての高度な資質を身につけたら、その資質を部族のために捧げないといけない。

何よりもまず自分の家族の大黒柱となり、勇氣ある保護者となり、親切で頼りがいのある隣人となり、家族とキャンプ、および部族全体を外敵から守らねばならない。

(4) 人間の魂は永遠に不滅である。

いつこの世にやってきて、去ったあとといざこへ行くかは、誰にも分らない。しかし、いよいよ死期が訪れたら、これから次の生活の場へ進んでいくのだということを知っておくべきである。その世界にどういふことが待ちうけているかは確かめることはできない。が、恐怖心を抱いたり、おののいたり、やり残したことを為すべきでなかったことを後悔したり泣いたりしてはいけない。与えられたかぎりの才能と制約の中で最善を尽くしたという自覚、そしてその死後の世界での境遇は地上での所業によって決まるという認識をもって、腹を決めることである。死の歌を高くに口ずさみながら、勝利の凱旋をする英雄のごとくに死に赴くがよい。

十二の戒律

(1) 神はただ一つ、大靈がおわすのみと心得よ。

永遠にして全知、全能であり、形体をもたない。いついかなる時も、あらゆる存在の中に行きわたっている。大靈を畏敬せよ。それと同時に、他人がそれをしていう形で敬おうと、それを尊重せよ。なんとなれば、すべての真理を手にした者は一人としていないのであり、自分が敬虔なる気持ちで敬っているものは他人からとやかく言われる筋はないのと同様に、他人が聖なるものとしているものには敬意を払わねばならない。(十字架が白人にとって聖なる象徴であることを知ったインディアンは、自分たちにとっては何の意味もなくもそれを尊重した)

(2) 大靈を形あるもの、つまり目に見える存在として描いてはならない。

(大靈の使いとしての雷神鳥サンダーバード、シンボルとしての鳥バード、竜ドラゴン、精靈のカチナスといった存在は絵画として描かれているが、大靈を描いたものは存在しない)

(3) 言葉の信義を神聖に保つこと。

いついかなる時でもウソをつくことは恥すべきことである。大靈はいついかなる時も遍在しているからである。大靈の名のもとに偽りの誓いをすることは死にも値する罪である。

(4) 祭日を大切にし、インディアンダンスをきちんとい、タプーには敬意を払い、部族の習慣を守ること。

それが部族内におけるよき一員として、その恩恵に浴する道である。なんとなれば、そうしたものは太古から伝えられてきた先輩たちの叡知から生まれたものだからである。

(5) 父と母、およびその父母を尊敬し、その言に従うこと。

年齢はすなわち叡知であり、自分への厳しい躰けは、終生、きつと自分の力となり利益となるであろう。

(6) 殺人を犯すべからず。

もしも部族の仲間を故意に殺した時は、それは死に値する罪である。万一過って殺した場合は、評議会にかけて、それ相当の償いが科せられるであろう。(戦争における殺人はまた別問題とされた)

(7) 思考と行為において常に純潔であれ。結婚時の互いの誓いを忘れず、人に同じ誓いを破らせることがあってはならない。

(シャイアン族やスー族においては、妻の側の不貞行為は死にも値する罪——少なくとも離婚の最大の理由とされていた)

(8) 盗むべからず。

(9) 必要以上の富を蓄えてはならない。

部族の他の仲間困っている入がにいるのに、自分だけ大きな蓄えを所有することは恥ずべきことである。

同時にそれは、下劣な罪の最たるものである。戦勝の結果にせよ、取引きの結果にせよ、あるいは大霊から賜った才能のお蔭にせよ、自分、ならびに家族の生活にとって必要以上のものが手に入った時は、部族の者を集めて施しの会を開き、余分なものを困っている人たちに、その困窮の度合にに応じて施してあげるべきである。とくに未亡人、孤児、身寄りのない人を優先すること。

(10) 健康に有害な火酒類(ウイスキーのような度の強いアルコール類)に手を出すべからず。

体力を奪い、賢明な者を愚か者にし、洞察力を狂わせるものは、食べものであろうと飲みものであろうと、試してみることもならない。

(11) つねに清潔を心がけるべし。

身体のみならず住居の中も清潔に保たねばならない。毎朝の水浴を欠かさず、必要とあらば蒸し風呂で体調を整えよ。肉体は霊の神聖なる神殿だからである。

(12) 自分の生活を大切にし、それを完全なものとし、その中で生じるものをすべて美化し、自分の力と美を誇りとせよ。

生きているということに魂の奥底からのよろこびを覚え、一日でも長生きして、部族のために役立つことを心がけよ。そして、いづれ訪れる死にそなえて、堂々たる死の歌を用意せよ。

インディアンの祈り

その一

大霊よ。

ここに謹んで私の祈りを捧げます。

私に憎しみを抱く者に対しても公正であるようにお導き下さい。

そして、いついかなる時も思いやりの心を忘れることのないよう導きたまわんことを。

もしも私の敵が弱くてひるみかけた時、その敵を赦す温かき心が抱けるよう御力をお貸し下さい。

もしも敵が降服した時は、その者を弱き者、私の援助を必要とする友として受け入れてあげる心を抱かせたまえ。

その二

大霊よ。

私の心から恐れ^ニの念を取り除いて下さい。

そして、人間として恥^ニずかしくない性格たらしめたまわんことを。

その三

神よ。

何とぞ叡智ある生き方を示したまえ。

そしてまた、取り越し苦勞をすることなく生きるための力を授けたまえ。

その四

ああ、大霊よ。

私の切なる祈りを聞き届けたまえ

取り越し苦勞に惑わされて人の道を踏みはずすことのないよう導きたまわんことを。

その五

大霊よ。

私に与えたまう試練に耐えるに十分な御力を授けたまえ。

常に自分の為すべき義務を忘れず、口を慎むべき時を過ることのないよう導きたまえ。

苦難を忍ぶべき時が至った時、野生の動物にならないだひとり身を隠してそれを忍び、愚痴をこぼして仲間^ニに迷惑を及ぼすことのないよう、導きたまわんことを。

敵と戦う時、もしも勝たせていただけるものならば、何とぞお力添え^ニをたまわんことを。

しかし——このことをとく^ニにお願いいたします——もしも勝つべき運命^ニにない時は、せめて、みじめな負け

方だけはせぬよう、お力添えをたまわらんことを。

その六

父よ。

お力添えを必要としている者があなたの前に立っております。

かく申す私でございます。

(こう述べてから願いごとを述べる)

レッドマンのころろ 北沢図書出版

アーネスト・シートン